

1 月例会も、残念ながら休止します。

コロナ第8波は止まるところを知らず、1月22日(日)の第521回例会は休止とし、かねてより懸案の「浪速文学散歩」は、コロナの収束を祈りつつ、2月26日(日)に順送りします。

天王寺駅をスタートし、「てんのじ村」の碑から、「めし」(林芙美子)、「日本三文オペラ」(開高健)に登場するジャンジャン横丁へ。一心寺、西方をのぞむ清水寺、「愛染かつら」の愛染堂に寄り、オダサク(織田作之助)が夕陽丘の女学生を想いつつ通った「口縄坂」を登ります。生國魂神社、法善寺横丁へ、そして水掛不動尊や「夫婦善哉」の店先へと、たっぴりとオダサクの世界に浸ります。最終は道頓堀あたりの予定です。



* * *

相変わらずの、本編の無い「蛇足」になってしまいますが、休止のご案内だけでは“愛想なし”なので、しばらくご笑覧ください。

西大寺宝ヶ丘のこと

昨年起きた大事件で、「西大寺」という地名は、俄かに全国のみならず全世界に響いてしまいました。近隣に暮らす私たちにとっては、日常の買い物場、交通の場、散歩の場で、戸惑うばかりです。もちろん燦歩会でも、幾度となくこの周辺を歩いています。

そんな「西大寺」で、実は85年前に、全国の耳目を集める出来事がありました。

1937年12月10日の大阪朝日新聞の紙面はこんな風に伝えています。時あたかも南京攻略戦のさ中、入城は13日の事ですから、紙面はほとんど南京一色。その中でこの記事だけが、それこそ“金色燦然”と異彩を放っていました。

何があったかという、前々日8日に古代の金貨が31枚も偶然発掘されたのです。「開基勝寶(かいきしょうほう)」の文字が、時計回りにくっきりと刻まれています。

奈良時代の正史「続日本紀」に、開基勝寶は天平宝字4

(760)年に、銀銭「太平元宝」、銅銭「萬年通宝」と共に発行されたと記されています。

ただ実物が確認されたのはそれまで僅か1枚、江戸時代1792(寛政4)年に西大寺の塔の跡から見つかったものだけで、後に明治天皇に献上され、現在は宮内庁の三の丸尚蔵館に収められています。そんな幻の金貨が地中からザクザクと現れたのですから、大騒ぎも当然でしょう。





その31枚は今、国の重要文化財として東京国立博物館に保管されています。写真は奈良国立博物館の特別展「西大寺 古絵図は語る（2002年）」図録に掲載された「開基勝寶」の1枚です。

後に奈良国立博物館長を務めることになる石田茂作（1894～1977）は、東京帝室博物館鑑査官として発見の現場に臨み、翌年3月「考古学雑誌」に「開基勝宝等発掘現場視察概報」を記しています。現場は「大軌電車（だいきでんしゃ＝今日の近鉄）西大寺駅とあやめが池^{ママ}駅との中間…電車線路より南約30間を隔て…小丘陵をなし、小松茂り遠く民家より隔たり…」病院工事のための土取りをしていた所、「地下約5尺のところ^{ママ}に土砂の灰黒色呈するところあり」「特別の埋蔵施設は無かった様で…発掘遺物は金銭31枚、銀銭1枚、銀碗2個、金板1枚、金塊2個を数ふ」そして、金銭の径約8分、重さ約3匁5分（直径＝約2.5cm 重さ＝約1.3g）などと、遺物を詳細に分析していますが、「然し遺跡の性質に就いては究め難い」としています。

新聞記事では、奈良県生駒郡伏見村となっているように、当時は奈良の町からはかけ離れた田舎の村でした。それが、奈良市西部の人口増につれ、伏見町になり、西大寺町になり、奈良市西大寺町になるのです。西大寺宝ヶ丘と呼ばれるのは、1974（昭和49）年11月1日の新しい住居表示によります。「宝」とはもちろん「開基勝宝」に因むものです。



この宝ヶ丘に住む、ボランティア仲間の知人が撮ってくれた「宝ヶ丘」の街区表示板と町の俯瞰写真です。石田茂作の報告の寂しげな情景と比べると、まさに隔世の感がありますね。

なお、石田の文にある近鉄電車は、この写真画面の右を走って、奥に見える生駒山と行き来しています。

ご案内

旧友会員の方、職員の方、入会大歓迎です。

入念な下見を行い、中途離脱も可能なルートを設定して、毎月第4日曜日に歩いています。

今後の予定は、

◎寿長生（すない）の郷（滋賀） ◎五花街を巡る（後半）（京都）

ただし、コロナの推移に合わせて、柔軟に対応して行きます。

参加ご希望の方は、会務担当 山村恵一にご連絡下さい。

（電話：090-1484-4403、メール：y-yamamura@ares.eonet.ne.jp）

コロナに注意しながら、一緒に気軽に楽しく歩きましょう。

（文 生島（おじま）幸弥）